

60年代における OR 活動の拠点

本シリーズ 22 の「黎明期に活躍された方々」に引き続き、本号では学会黎明期後の 20 年くらいの間の OR 活動を、本連載の本編で紹介できなかった方を中心にご紹介し、本連載を終えたいと思います。

以下の本文は、当時の記憶を辿るために行われた座談会（出席者：小笠原暁先生、森村英典先生、柳井浩先生、若山邦紘先生、進行役：牧本直樹、山下英明）で話し合われた内容をもとに、主として森村英典先生、小笠原暁先生、柳井浩先生、伏見正則先生が執筆されたものです。（OR 誌編集委員会）

黎明期に続く 20 年くらいの間、つまり 50 年代後半から 70 年代前半にかけて、いわば日本の OR 揺籃期から成長期における OR 活動の拠点となった企業や大学などを挙げ、そこでの活動の中心となった方々を思い出してみよう。ただし、その中には今なお現役として活躍しておられる方も多いが、それらの方々については、シリーズ第 2 段としていつか取り上げられることを期待して、ここでは、故人となられた方や OR 活動からは引退された方に重点を置きながら概観する。

国鉄 鉄道技研を中心に早くから OR の利用が試みられていた。OR 学会誌の第 1 号となる「経営科学」第 2 巻第 1 号の巻頭を飾った論文は、前田活郎氏（後に成蹊大）の輸送型問題の解法に関するものであったが、同じ号には卜部舜一氏（後に千葉工大）らによる機関車用練炭の配給計画を LP で作り、当時の金額で半年に 1,900 万円の節約が見込めるといふ事例報告も掲載されている。まだ計算機らしい計算機を使える人はごく限られていたこの時代に、手回しの計算器を駆使してこの LP に挑戦されたと同っている。両氏は翌年にも論文を寄せられているが、59 年 10 月発行の第 3 巻第 2 号には阿部俊一氏（後に青山学院大）のお名前も見られる。前田氏が初代室長になられた計画管理研究室からは、氏ご自身や阿部氏の他にも大平坦（横浜国大）、鈴木誠道（上智大）両氏など、後年各大学で OR の研究と教育に当たられた方々を輩出する。

国鉄本体の OR を最初に推進したのは小野木次郎副技師長で、学会の理事や副会長も務められた。58 年に審議室の中に「OR 担当」が設けられ、それを担当されたのが横山勝義元会長（本シリーズ 20）である。同氏は審議室長として国鉄 OR の元締めのような役割を果たされた後北海道支社長に転じ、学会の北海道支部を育てられた。同支部でのご活躍については本シリーズ 20 に詳しいが、OR 学会では理事・副会長・会長を歴任され、「OR 事典」の編集にも積極的に貢献された。

58 年に第 1 回国鉄 OR 研究会、59 年に国鉄 OR コース開設、60 年に国鉄 OR センター開設、と続く歴史からも伺えるように、当時の日本の OR 活動の拠点として国鉄は重きをなしていたのである。例えば 60 年と 61 年に発行された「経営科学」誌 7 冊の論文著者名の中には、阿部政男、宮本俊光、家長吉千代、渡辺典、金松正世、三嘴武、藤本正明といった多数の方々の名を連ねている。そして、学会活動としては横山氏とともに矢部眞氏のご活躍が特記されるであろう。矢部氏は 59 年度から 4 年間も竹内啓元副会長とともに刊行物幹事を務められただけでなく、日科技連などの活動にも積極的に参加され、さながら国鉄 OR マンの代表のような存在であった。

電電 電電公社も電気通信研究所が研究活動の中心であった。「黎明期」（本シリーズ 22）の茅野健氏や松島康夫氏、唐津一氏なども含め、通研出身者のご活躍は著しい。元々待ち行列理論の起こりは電話交換であるから、戦前からトラヒック理論の研究は進められていたので、待ち行列関連を中心に通研の研究者が OR 学会の研究活動に積極的に参加されることは当然といえば当然であろう。中でも中心となったのは宇田川銈久氏である。氏が丹念に集められた数学公式を基に、森口繁一、一松信両先生との共著として 56 年に出版された岩波全書の「数学公式」全 3 巻はいまだにその価値を失っていない。宇田川氏は名古屋大学に移られて間もなく急逝されたが、通研のトラヒック研究室は重要な成果を挙げ続け、その出身者は雁部頼一、村尾

洋, 中村義作, 藤木正也, 橋田温, 川島幸之助の各氏等実に多くの方々が各大学で OR の人材を育てられていて, 日本の OR 教育の人材供給源として今に至っている。また, 60 年には本社に OR 専門委員会が設けられ多くのプロジェクトを取り上げた。したがって OR 活動をされた方々は多いが, ここでは池永英夫氏と大前義次氏のお名前を挙げておこう。大前氏は日科技連の OR 教育コースの講師も長年勤められたご経験を生かして, 電電ご退職後も大学において学生の教育に当たられた。

道路公団 60, 61 年度の学会長は道路公団総裁の岸道三氏であったが, 同氏を補佐して理事を務められた藤森謙一氏は, 岸会長退任後も庶務理事や副会長を歴任され, 学会の運営に多大の貢献をされた。道路の OR を推進された建部健一, 竹原清隆, 高見貞二郎の諸氏は学会の運営や研究活動などにも積極的に参加された。

東芝 山口襄氏を中心とする OR 推進グループには, 原野秀永, 海辺不二雄両氏などもおられ, 活発な事例研究とともに, 学会や日科技連での活動もされて, 「OR を築いた人々」の一環を担われている。原野氏(本シリーズ 17) は惜しくも去る 6 月に故人となられたが, このシリーズにも登場されているのでここではこれ以上触れない。山口氏は東芝だけでなく経済界のドンともいわれた土光敏夫氏が OR 学会長を引き受けられた時期には副会長として補佐された。同氏は草花を描く日曜画家という趣味人でもあったが, 「経営者に役立つ OR をもっと研究せよ」と口を酸っぱくされて事あるごとに言っておられことを思い出す。海辺氏は, 米国育ちの堪能な語学力を生かして, 来訪外国人学者などの OR や QC の講演会通訳を数多くこなされただけでなく, さまざまな実務に OR を活用されたし, 学会でも庶務幹事や副会長を務められた。

日立 OR 学会第 2 代会長の大西定彦氏は当時日立製作所副社長であったが, OR 発展のためにはまず若い研究者を育てることが必要と私財を学会に寄付されるほど人材の育成に熱心に取り組まれた。これを基に制定された大西賞が現在の文献賞へと受け継がれ, その役割を果たしている。大西氏の影響があったのかどうかは知らないが, 初期の頃の学会誌の事例研究論文の著者には日立の方が比較的多いようである。そのような活動に裏付けられてのことと思われるが, 学会の実施賞を受けられたのは 2 回目という早い時期であるし, 後年, 吉山博吉会長が OR 学会長を引き受けられたの

もそのような伝統が続いていたためであろう。

NEC 小林宏治氏は日本電気の社長時代に 3 年, 会長時代に 2 年, OR 学会会長を務められて, 学会法人化の陣頭指揮をされた。同氏は品質管理の活動も熱心に推進され, テミング賞も受けられている。また, 水野幸男氏(本シリーズ 10) も顧問時代に学会長を務められたが, 同氏の学位論文は在庫管理理論であり, 日科技連の OR 教育コースでは在庫管理の講義を長く続けられたしテキストも書かれており, 根っからの OR マンであった。

松下グループ 60 年代前半の OR 誌や学会誌に松下電器の田村晴也, 景山謙一郎両氏のお名前が見られるが, 残念ながら筆者にはご面識がない。松下電工, 後松下通工の藤川忠重氏はその磊落なお人柄で学会内の人脈は広がったようである。松下通工は茅野, 唐津という大先輩が重役を務められたので, ナビシステムの開発など OR 的研究には早くから取り組まれていたと承知している。また定方希夫氏(後に東海大)も活発な OR 活動を続けておられた。

三菱電機 ここも古くから OR 活動をされていて, 今居謹吾氏が中心であったろうか。その後も「経営科学」誌や OR 誌に服部寛氏や徳山長氏など何人もの方々が論文を寄せられており, OR 活動は続いていた。それに続く小池将貴氏は研究活動とともに学会運営にも貢献され, 平成の初めには岡久雄副社長が学会長を務められた。

三菱原子力/三菱総研 わが国の本格的な計算機の導入は三菱原子力における計算センターであった。必然的に OR マンがここで育ち, 後に三菱総研に移って三菱系の OR 活動の中心になった。まずは菅波三郎氏で, 三菱金属から移られたが, OR 事典の「年表」にもあちこちにお名前が出るほどの黎明期から活躍された当時の若手のホープであった。残念なことに, 独立された後に急逝されてしまったが, その卓抜した OR センスは多くの人を引きつけていた。菅波氏の後は反町洋一氏が三菱総研の OR 部門を束ねておられた。同氏も学会の副会長を務められている。

電力各社 電力の各社はそれぞれの地方における OR 活動の中核を担っており, 特に東北, 中部, 中国など各電力は有力な OR ワーカーを擁していた。それらをまとめる役もこなしていたのが電力中央研究所で, 学会活動の面でも大いに貢献をされていた。その最初の方は小野勝章氏であろう。実務と研究とを両立されて活躍された。電力中研は OR 研究者の養成機関の趣も

持っており、今野浩元会長や佐久間孝・森清堯・鈴木道夫・大山達雄各副会長などが続々と続く歴史を持っている。小野氏は、電力中研を離れた後独立して活動をされていたが、突然亡くなられてしまったのはOR学会にとっても大きな損失であった。

本告光男氏を先頭に、小野勝次先生（本シリーズ3）の下で中部支部の活発な活動を支えたのが榎本久徳、田中庸平、久野源三の各氏ら中部電力の面々で（本シリーズ3の記事参照）、電柱の取り替え計画など事例に則した深い研究を積み重ねられていた。また、中国電力にあっては権藤元氏のご活躍が目立つ。権藤氏は中国電力退職後もORの塾を主宰され、最近までそこで扱った事例などを学会で講演されている。後に北海道電力社長になられた戸田一夫氏は給電システムの設計にOR手法を利用した事例研究を発表され、北海道支部長も務められている。東北電力も東北支部の中心であり、代々の支部長は東北電力の方であった。NHK 齋藤嘉博氏（後に学会副会長）は学会活動や日科技連での教育活動も熱心に進められた。安達弘之氏もその後を継いで活躍された。同氏は、大川雅彦氏ら後継者を育てながら現場に役立つシステム開発を続けられた。

鉄鋼各社 八幡製鉄では、堀川映二氏（後九工大）をリーダーに内山辰丙（初代九州支部長）、菅原晟介、西木俊彦などの各氏を始め多くの方がOR活動をされていた。国澤先生がリーダーとなり、主として水野幸男元会長が設計の任に当たられてきた待ち行列のシミュレータの2号機は、これらの方々のご努力で、工程管理の専用機として八幡製鉄所に導入された。

鉄鋼業にはOR手法を利用して解析するのに適している諸問題が山積しているため、その適用の対象も多様である。また、鉄鋼各社は技術的なノウハウの交流に比較的積極的であったようで、各社競ってさまざまな問題に挑戦されていた。このような背景の下で、日科技連主催の「数学計画シンポジウム」の第8回は「鉄鋼業」をテーマとして66年に開催されたが、その席の全報告はOR誌の11巻7号に掲載されている。ここで報告されたのは、八幡製鉄の堀川氏ら3氏の他、日本鋼管の今泉益正、中村昌平、坪井邦夫の諸氏、神戸製鋼の守屋武治氏ら2氏、富士製鉄の成広清士氏ら4氏、川崎製鉄の黒田浩氏、住友金属の竹本豊氏であった。

この他、川崎製鉄の三平武男氏、神戸製鋼の広瀬一夫氏、日新製鋼の山本昌氏、重山康祐氏などが活躍さ

れていたのを記憶している。

東亜燃料 石油各社はLPを実務に日常的に利用することから、ORが本務であるような部署があったようで、特に東亜燃料は日常的なOR研究や学会活動に熱心であった。このことは本シリーズ13の「無私の人—小田部齊氏」にも見られる通りである。そこでも触れられたが、小田部氏を補佐して学会活動に取り組まれた川野幸三郎氏のお名前も忘れることはできない。数多くの大学人と交友関係を築かれた企業人として何本かの指に入る方であろう。なお、グループの東燃石油化学にも井上文彦氏などがおられた。

三菱石油 OR事典の年表によると、江崎武氏は学会準備委員会や58年のシンポジウムの主要メンバーとして名を連ねられており、やはり58年の「トップ・マネジメントによるOR会議」には竹内俊一社長が出席されている。そのように早い時期からORについて関心を持った同社は59年にはOR室を開設されたが、その伝統あるOR屋さんの中には、石原直哉氏、さらには学会の運営にも努力された新野央氏や現在大活躍中の高井英造氏などがおられる。

日本航空 60年代、日本の空のキャリアは日本航空1社であり、航空会社の同業者は外国企業であった。そして、世界の航空会社の加入するORグループが存在していたようである。そのため、日本航空の国内でのOR活動はあまり活発ではなかったかもしれないが、諏訪勝義氏、橋本定康氏など何人かの方がOR誌や学会誌に寄稿されている。筆者の知る中心人物は藤波哲太氏であり、地道な勉強の機会を頻りに設けられていた。また粥川浩平氏は学会の運営でも活躍された。

東洋紡 関和文氏は経営科学協会設立やOR学会実行委員会にも参加されている関西地区のORワーカーの中心的存在で、椿常也氏とともに作業員配置計画などの事例研究を発表されている。大島隆雄氏のお名前もOR誌の寄稿者の中にある。

東レ はじめは東洋レーヨンという社名であったが、藤代侑宏氏、木下雄三氏、岡本二三雄氏などが活躍されていた。ここには、OR室という組織もあったようである。

製薬各社 関西では製薬会社がOR活動の拠点でもあったが、その中でも田辺製薬の朝尾正氏は、田坂誠男氏らとともに同社の生産量と生産品質のバランスを管理するためにORを活用されるなど、同社のリーダーとして広範な活動を続けられ、後75年頃学会副会長としても尽力された。武田薬品では門川清美氏が経営

科学協会や OR 学会の創立にも参画された。また、塩野義製薬の浅野長一郎氏（後に九大）、後藤昌司氏などが、確率・統計と OR の境界領域を研究されていた。おしなべて製薬各社の OR 活動は活発であった。

大阪瓦斯 62年に大島正人計数管理室長を委員長として課長クラス7名による OR 委員会が発足した。3年後には13名が所属し、さまざまなプロジェクトの中にその1人が入って活動を続けた。中島裕之、山本昇氏のお名前は「OR 事典」に残っている。

防衛庁 通称を OR 班という組織もあり、その責任者を務められた多田和夫、柏井澄夫、今村和男の諸氏を始めとして多くの方々が学会活動にも熱心に励んでおられた。また防衛大学の OR 研究者も研究の推進と人材の教育に当たっており、初期の頃には三根久先生（本シリーズ4）もおられたが、間もなく岸尚氏や鈴木武次氏などが待ち行列研究の一つの拠点を作られた。岸氏の OR 史研究も名高い。

早大生研 早稲田大学はミシガン大学の協力で56年に生産技術研究所を設立したが、ここには多くの OR 研究者がおられた。学会の設立時には既に存在していた機関であるから、OR の研究や普及の一大拠点となった。松田正一、西野吉次両先生を指導者として、当時若手の出居茂、高橋磐郎、五百井清右衛門、阿保栄司などの諸氏が研究発表をされたり、学会の運営に尽力されたりした。出居氏が OR の世界から去ってしまったのは30年程前のことであるが、米国仕込みの達者な語学力も生かして75年に開かれた IFORS と TIMS の国際会議の事務局を取り仕切ったのご活躍は誠にめざましいものであった。

東大 工学部計数工学科には森口繁一先生（本シリーズ1）を中心に伊理正夫先生（本シリーズ18）もおられたからもちろん OR の一大拠点であり、今野浩元会長、伏見正則現会長、大山達雄元副会長、鳩山由紀夫首相、など続々と日本の OR を牽引する方々を輩出した。

統計学と品質管理の重鎮・奥野忠一氏は、学会の機関誌となった本誌の2代目編集長として学会誌として編集・発行するための基礎固めをされた、本誌にとっては恩人とも申すべき方である。そのとき奥野先生を補佐された中心が伏見会長と都市工学科におられた腰塚武志元副会長であり、経済学部竹内啓元副会長や都市工学科の奥平耕造先生も重要メンバーとして編集委員会に参加されていた。奥平先生は若くして亡くなってしまわれたが、その溢れんばかりの才能を惜しむ

声は大きかった。ダンツィク（本シリーズ14）とサアティという OR 界の巨人が残した「コンパクト・シティ」を訳されたが、今頃になってこの言葉が流行りだし、この本の価値が見直されているようである。

工学部の航空工学科には近藤次郎先生（本シリーズ2）が、電気工学科には環境問題などで活躍されている茅陽一先生がおられたし、医学部には推測統計学の「元祖」でもある増山元三郎先生や高橋暁正先生、経済学部には宮沢光一先生がおられた。宮沢先生は統計学の他に決定理論やゲーム理論も研究されており、門下生には竹内啓元副会長や梅沢豊元副会長などが若手として活躍されていた。竹内先生はすこぶる数学に強い統計学者として有名であるが、OR 学会にも随分寄与された。特に若い頃は編集委員として長期間努力され、後に科研費の「重点領域研究」の代表者として OR 学会のみならず各方面の多数の研究者を束ねて活躍された。

東工大 数学教室には河田龍夫先生（本シリーズ5）、国澤清典先生（本シリーズ11）がおられ、その門下の小田中敏男（後、都立工科大）、坂口実（後、大阪大）両先輩、森村（本シリーズ16）と真壁肇元庶務理事、水野幸男元会長（本シリーズ10）などは OR 学会を活動の場としていた。また、経営工学科には松田武彦元会長（本シリーズ7）がおられ、後に真壁氏、森雅夫元副会長、鈴木久敏氏（筑波大）へとつながる系譜になる。この中に鳩山首相も数年間在籍されていた。少し後になるが、ゲーム理論の鈴木光男氏が社会工学科と情報科学科に加わり、武藤滋夫現副会長を含む多くの優れた研究者を育てられた。

慶應大 1959年、当時武蔵小金井にあった工学部に管理工学科が設立された。それまで東大工学部におられた山内二郎先生が、日本の産業の行くべき方向を考えて、この分野の学科を特に慶應義塾に作ることを努力されたのだ。山内先生が集められた人材は実に多士済々であった。坂元平八先生は戦争中から日本の“OR 的活動”にもかかわってこられた大御所で、ヤードにおける鉄鉱石の並べ方と使用の順序に関する優れた業績を上げておられた。若手には、千住鎮雄（本シリーズ9）、関根智明、浦昭二、森本治樹、鷲尾泰俊の諸氏が集まり、統計・OR の分野で学会や日科技連などで盛んな活動を展開されていた。千住氏は当時助手であった伏見多美雄氏とともに、「経済学工学」というジャンルを確立され、OR の具体的な適用法として広く学ばれた。関根、浦、森本の三氏は共同で

T. L. サーター著の「オペレーションズ・リサーチの数学的方法」を翻訳され、この分野に大きなインパクトを与えた。管理工学科ではなかったが、刀根薫元会長も慶應の所属で、管理工学科でも大学院生の指導に協力されるとともに、PERT-CPMの普及などにも努めておられた。助手や大学院生たちもSSORの活動などに積極的に参加し、その準備のための合同勉強会が、東工大の森村研究室で行われていた。

京大 63年に三根久先生(本シリーズ4)が数理工学科の教授に着任されてから、長谷川利治元会長(本シリーズ21)、茨木俊秀元副会長と続く拠点となり、大野勝久氏(名古屋工大)、徳山博于氏(住友金属・静岡大)を始めとする多くのOR研究者を輩出する。土木工学科の長尾義三氏や佐々木綱氏、経済学部の瀬尾美巳子氏もOR学会で活躍されていた。

神戸商大 神戸商科大学管理科学科は昭和38年我が国ではじめてのOR専門学科として誕生した。第1講座：オペレーションズ・リサーチ 第2講座：オペレーションズ・リサーチ モデル各論、第3講座：確率・統計、第4講座：確率・統計応用、第5講座：コンピュータ、第6講座：コンピュータ応用の6講座編成で、数学、確率・統計、コンピュータを基礎に、組織の科学的な計画・管理手法を取り上げた旗色鮮明な学科であった。創設当初は、小笠原暁元会長(本シリーズ19)、普及賞を受賞された青沼龍雄氏、秋葉博元関西支部支部長がORを指導され、後に真鍋龍太郎元副会長も在籍された。文科系の神戸商大の中で完全に理科系の管理科学科の創設により、この後わが国の経済・経営系の大学にこれに類する学科が創設されていた。この学科も県立大学の統合による兵庫県立大学の発足時に姿を消した。

阪大 「黎明期」に宮脇一男、横山保、万代三郎、大沢豊各氏らのご活躍があり、後に西田俊夫元副会長(本シリーズ12)や前述の坂口氏が加わられて、一つの拠点を築かれた。

活躍されたORワーカーと大学人 誌面の都合もあり、ここに拠点として挙げた企業や大学以外にも何人もの研究者が活躍されていたのに細かなことを述べるので、以下にまとめて記させていただく。

高橋浩一郎氏は後に気象庁長官を務められた気象学者であるが、自動車事故の数理モデルについて「経営科学」に論文を発表されるなどOR学会でも活躍された。鈴木栄一氏(気象研)も熱心にOR活動をされていた。山口英治氏(信越化学)はOR誌の編集委員と

して、また学会理事として長期間にわたった活躍をされ、現場のORの啓発や推進に積極的な貢献をされた。

加藤幸彦(明治製菓)、松井進作(旭電化)、門山充(博報堂)、矢矧晴一郎(富士銀行)の各氏らは、OR誌で毎号そのお名前を見るほど活発な執筆活動もされていた。60年代の「経営科学」誌の方では、米田桂三氏(横浜市大)、久保田耕造氏(住友化学)、有水彊氏(林業試験場)、鍋島一郎氏(都立広尾高・幾徳高専・電通大)、石川甲子男氏(国土地理院)、司馬正次氏(北大)、福田治郎氏(岐阜大)、吉原友吉氏(東京水産大)、山田孜氏(岐阜大・中央大)、加瀬滋男氏(大阪府大)、津村善郎氏(東理大)、依田浩氏(名工大)、山本正明氏(法政大)、須永照雄氏(九大)、矢島謹一氏(国鉄)などのお名前が並んでいる。いずれも活発なORの研究を続けておられた。

三上操(九大)、古瀬大六(小樽商大)、御園生喜尚(東北大)の各氏も60年代にOR研究を重ねられ、いずれも(副)支部長や学会副会長としても活躍された。牧野都治元副会長は今なおお元気にORの研究を続けられているが、61年に「経営科学」に論文を寄せられている。このときは富士精密工業に所属されていたが、その後高崎経済大、茨城大、東理大と移られながら一貫して精力的に研究を進められた。

関西OR協会 1959年、関西OR協会が大阪工業会関西生産性本部内に設立された。関西OR協会は、横山保、西田俊夫、小笠原暁、長尾正などの諸氏を講師にORコースを開催し、ORの普及・啓発に取り組んだが、その裏方を務めたのは関西生産性本部の多田信吾氏であった。多田氏は、財界・学界に顔が広く、OR・IE・コンピュータなどの研究会、研修コース、海外視察団などを次々に企画し、実行に移した。関西のORにとって忘れることができない人物である。

学会事務局 OR学会50年の歴史を振り返るとき、学会事務局の果たした功労にも一言なくてはならないであろう。鈴木規子さんは59年から87年までの長期間にわたって事務局を支えてくださった。学会発足時の事務局は日科技連の中に置かれ、事務も日科技連の職員が兼務していたが、独立した事務局をもってからもしばらくは、紀伊国屋書店、橋梁構造研究所、富士学院と間借り生活を続け、現在の学会センターに落ち着いたのは72年のことである。その間に学会の規模も活動内容も発展を続けたので、それに伴って事務量も増大を続けたが、学会長を引き受けて下さった財界人が異口同音に言われていた「気持ちの良い学会」と

いう雰囲気を保つために、鈴木さんを先頭にした事務局の方々のご努力があったことをここに銘記したい。

最後に、ここに挙げた方々のお名前や思い出にしても、つまりは執筆に当たった少数の人の身近にいた方々に限られるのも致し方ないことであるし、何よりも記憶そのものが曖昧にもなっているため、大切な方を落としているおそれも大きい。しかし、実に多くの

方々が熱心に OR 活動を続けられていたか、ということに思いを馳せていただければ、本稿を草した目的の大半は達せられたと考えている。学会創立当初から各有力企業では OR 活動が模索され、その中には学会の運営にも深く関わりながら現場での問題解決に熱心に取り組まれた諸先輩も多数おられた。そのような方々のご努力の上に今日の OR 学会があるということを強調しておきたい。